大原焼と祈り

大原焼は 500 年も昔から、鍋や椀などを作り、人々の暮らしとともにありました。

その特徴は一言でいえば「火の器」です。生活必需品ともいえる焙烙（ほうろく）、土鍋、土がま、土びん、竈（くど）、コンロ、火鉢、火消壺などを主力製品とし、江戸から明治、大正、昭和と続き発展しました。残念ながら、エネルギーが薪から LP ガス、電気へと激変する中で昭和 60 年（1985）に伝統的大原焼は終焉を迎えます。

大原焼は火の器を主力に甕（かめ）、壺、井戸側、土管、瓦なども手がけ、併せて仏像、狛犬、土面、宝殿、供養塔など祭祈関係に特異な足跡を残しています。

今では科学的に理解できる天変地異、病気などの身体的苦痛や事故なども、神の怒りや厄災として捉え、恐れ、不安に怯えていました。決して豊かとはいえない庶民の日々の暮らしの中で、心のよりどころも必要です。八百万の神（やおよろずのかみ）ともいわれるように、自然と共に生きてきた日本人は森羅万象、自然に存在するものを崇拝し、あらゆるものに神が宿っていると考えました。

大木や岩や山などの自然物を、また、神の分身としての動物や神が宿る祠を身近な場所に祀り、人々の祈る想いや平安への願いを込める対象としました。

豊作祈願・病気治癒・厄除け・災除け・延命・家内安全・子孫繁栄・安産・火伏せ・旅や航海の安全・・・・・

約 150 年前にはコレラが、約 100 年前にはスペイン風邪が流行し多くの人が亡くなりました。今、私たちは、新型コロナ禍にあります。

今回は、「大原焼と祈り」をテーマに展示します。